二〇二四年度　卒業論文

仏教と漫才
―伝道の観点からの一考察―

L210064
城　正法

目次

序論・・・1
本論・・・2
第一章　漫才の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第一節　萬歳と仏教・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第二節　萬歳から漫才へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第三節　現代の萬歳について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第二章　漫才視点からの分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第一節　実践例からの分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第二節　笑いの技術における分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第一項　笑いの分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第二項　漫才法話における笑いの分類からの考察・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第三章　法話視点からの分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第一節　法話の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第二節　法話における技術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第三節　行う対象者の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第四章　漫才法話実践者への聞き取り調査・・・17
第一節　那須弘紹氏への聞き取り調査・・・17
第一項　聞き取り調査の概要・・・18
第二項　聞き取り調査の内容と分析・・・18
第二節　保田正信氏への聞き取り調査・・・22
第一項　聞き取り調査の概要・・・22
第二項　聞き取り調査の内容と分析・・・22
結論・・・25
註
参考文献

序論

本研究では、仏教と漫才による伝道の可能性について、漫才法話を中心に論じていくものである。近年、これまでの法話による伝道活動に加えて、漫才法話という新たな伝道活動が行われてきている。特に、コロナ禍であった二〇二〇年には、地方のローカル番組ではあるものの、コーナーの中で漫才法話が取り上げられており、テレビで漫才法話を実演されていた。また、YouTubeやネットでの漫才法話の動画や実践の記事など、少しずつではあるが、漫才法話が世間に知られるようになってきている。まず、漫才とは、多くの人々がテレビで目にするものであり、年末年始に漫才の大会や番組が行われるのは伝統となり、今や日本の文化として浸透している。ではどうして漫才法話は生まれたのだろうか。これは「伝える伝道」から「伝わる伝道」への変化の一例だと私は考えている。伝道においては、仏教に興味がない、もしくは少しだけ知っているという方など様々な人に仏教を知り、興味を持ってもらうことが重要である。そのような現代版の伝道活動の一つとして漫才法話は実践される価値のある伝道の形だと考える。

本研究の意義は、僧侶による漫才法話という活動について、新たな伝道活動の一つと捉えることができるのかについて、漫才法話の特徴や現状から見えてくる課題や可能性から考察するところにある。

漫才法話を考察していく際の視点としては、漫才と仏教の関わりについて、その起源を辿りつつ、漫才の変遷を基に今後の仏教との関わり方を考察していく。また、実際の漫才法話について、漫才と法話、二つの視点から分析を行い、実際に漫才法話実践者への聞き取り調査を実施し、現在の漫才法話の在り方、そして今後の可能性

と課題を考察していく。未だ先行的研究も少ない分野であることから、実験的な一視座ではあるものの、今後の伝道活動の一助となるのではないかと考えている。

本論

第一章　漫才の歴史

第一節　萬歳と仏教

まず、漫才の基となった萬歳について、全国各地で行われていた萬歳であったが、中でも尾張萬歳に仏教との関連があった。尾張萬歳の変遷について、南博、永井啓夫、小沢昭一『ことほぐ萬歳の世界』によりながら簡潔にまとめると、弘長二年、愛知県名古屋市東区矢田町に、無住国師が訪れ、臨済宗の寺である長母寺を開山した。そこで無住国師が法華経に関する萬歳歌詞を作ったことをはじまりとする説が定説となっている。そして、江戸時代になると、鎌倉時代から始まった法華経萬歳につづき、新たに浄土真宗について歌った六条萬歳、浄土宗や天台宗について歌った御城萬歳、神道の家で行う神力萬歳、めでたいときに歌われた地割萬歳の四種類が作られ、これらを併せて五萬歳と呼ばれるようになり、尾張萬歳の基本となった。[1]今回は、中でも浄土真宗と繋がりのある六条萬歳に注目する。六条萬歳について、岡田氏は次のように述べられている。

②六条萬歳

本願寺萬歳、御門徒萬歳、御門跡萬歳ともいう。浄土真宗(真宗)をたたえ、本願寺の御堂のすばらしさと、親鸞聖人の一代記を歌っている。(中略)六条萬歳は、西本願寺再建直後の御堂を歌っていると考えられるので、真宗が幕藩と手を結ぶようになっていった江戸初期の作であろう。従って、京や江戸城下にふさわしい萬歳として、真宗の家で演じた事が考えられる。[2]

このことから、近年急に漫才と仏教が関わりをもつようになったわけではなく、漫才の前身である萬歳の時代こそ、現代以上に浄土真宗との関わりは深かったことがうかがえる。では、次節では、これら萬歳がどのようにして漫才へと移り変わっていったかについて、『ことほぐ萬歳の世界』によりながらまとめる。

第二節　萬歳から漫才へ

尾張萬歳は、尾張で行われる萬歳であるため総称としてこう呼ばれていたが、細かく地域ごとの名称もあった。明治十年ごろ、その中に伊六万歳というのがあった。当時、他の地域の萬歳というと「～萬歳」であったため、この伊六万歳は浮いていたことに加え、他の萬歳とは違い下ネタをはじめ下品な笑いをしていた。しかし、人気があったため、その後大衆芸能としての地位を確立した。そして明治二十七年ごろ、大阪で江州音頭の音頭取りをしていた玉子屋円辰が尾張にやってきて、尾張萬歳を習った。その際、伊六万歳も習い、明治三十年ごろから関西の舞台で「名古屋萬歳」と称して演ずるようになった。これが大衆娯楽としての漫才の始まりである。[3]

以上より、最初はさまざまな宗教に関して歌うのみであった萬歳が、時代を経て幅広い手法の取られるようになり、それらの変化を経た萬歳を学んだ玉子屋円辰の興した万歳が、現在の漫才となっていることがわかった。

第三節　現代の萬歳について

では、第一節で見てきた尾張萬歳をはじめとして、萬歳の現在の状況を確認する。まず尾張万歳、三河万歳、越前万歳は平成七年に重要無形民間文化財の指定を受けている。しかし、現在は、全国どの万歳も後継者問題に悩まされている。尾張万歳においても保存会が活動されているが、二〇一一年の段階で十一人しか所属されていない。現在の浄土真宗と尾張万歳の関連を調べてみたが、二〇二二年に浄土真宗本願寺派西本願寺のYouTubeチャンネルにおいて、「仏教と伝統芸能シリーズ」として特集されていたが、それ以降は特に取り上げられてはいない。このことから、漫才と基は共通の万歳ではあるが、現代の伝道活動における効果としては、薄いことが考えられる。その理由としては、万歳は変化をしない、伝統を受け継ぐという特徴があるのに対して、漫才は時代の流れに合わせて形態を変化させていくという違いにある。そのため、現在まで廃れることなく展開され続け、漫才法話という形態も誕生したのではないだろうか。また、尾張万歳保存会会長である北川勝久氏は、今後の活動について記事の中で次のように答えられている。

実は、尾張万歳では出演する場所を増やすための活動をやっていません。もちろん依頼を受けて、色々な場所での芸の披露は行っているんですが、無料でイベントに出演したり、後継者を募るために広くアピールす

ることはあまりやっていないんです。伝統芸能に参加する人数を増やすなら、そういう活動も行うべきだとは思うんですが、人が増えると、悩みも増えてしまうんです。誰がどのイベントに出るかとか、あまり芸を披露できない人が出てきたり。年に十五回くらいの機会しかないので、そのために一年間稽古を頑張ることができて、しかもプロとして高いクオリティの万歳を披露できる人じゃないと尾張万歳は務まりませんからね。[4]

このように、後継者問題で危機的状況であるはずの尾張万歳だが、ただ参加する人数を増やすのではなく、正確に伝統を受け継いでいくという目的が重視されており、この点から高い伝道的効果は見込めないと考えられる。

以上、浄土真宗の要素を含み、伝道の可能性のある万歳の現在から考察を行った。これらの違いを踏まえて、より一般的に知られている漫才の要素を含んだ漫才法話の可能性を、浄土真宗の伝道という観点から考えていく。

第二章　漫才視点からの分析

第一節　実践例からの分析

近年の漫才法話が浸透してきたことを示すイベントとして、北海道教区慶讃行事『漫才法話んグランプリ』が挙げられる。この章では本イベントを例に考察していく。

本大会は、二〇二四年五月十二日に親鸞聖人御誕生日八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃行事として西本願寺札

幌別院で行われた。まず開会式が行われるが、その中で『重誓偈』のおつとめが行われる。その後、北海道教区教務所長である宇野哲哉氏による挨拶が行われ、メインである出演者による漫才法話が合掌、念仏に続いて始められる。以下、出演者それぞれの実演内容を簡単にまとめたものとなっている。なお、全七組の出演者がおられたが、本研究のテーマに則り、漫才形式で漫才法話を行っていた五組を取り上げることとする。

①三千大千世界(木本晃英、原田真哉)

特徴：龍谷大学の同期コンビ

[主に学べること]浄土真宗、阿弥陀如来のお心／四弘誓願／十八願の重要性／阿弥陀様の立ち姿の意味

②観音日和(築山弘知、工藤弘道)

特徴：ホリプロコム所属、真言宗のコンビ

[主に学べること]実際の真言宗のお経／真言宗の合掌

③Seppo-CCQ(那須弘紹、藤岡教顕)

[主に学べること]ご門主について／親鸞聖人の生涯

④伝道集団アサカラザル

特徴：バンド法話や手品法話なども行なっている

[主に学べること]法話の構成

⑤ドドん(石田芳道、安田義孝)

特徴：曹洞宗の僧侶、浅井企画所属

[主に学べること]曹洞宗の教え

以上より、大会そのものとしては、浄土真宗の僧侶が多いのはもちろんだが、真言宗や曹洞宗の漫才コンビも招待されており、浄土真宗の知識があるような観客や門徒でも楽しむ事はできていたのではないかと思われる。漫才法話の内容としては、全ての組が約十五分という時間の中で静かな時間というものがなく、聞き手が眠くなったり、飽きたりする事はなさそうに思われる。仏教の教えをそのまま教えるのではなく、言い換えたり、身近に感じさせたりすることでわかりやすく教えるというのは、漫才との融合だからこその特徴だと感じられた。

次に観客の様子については、もちろん漫才という点でウケるウケないの問題はあるが、通常の法話と比べても明るい雰囲気は保たれていたと思われる。また、漫才法話の中で、観客に動きを求めたり、演者が舞台を動き回れたりする事も観客を飽きさせないことにつながっているように思われる。しかし、来ていた観客に注目すると、連れてこられた赤ちゃんや小学生はいるものの、中学生や高校生、大学生といった層はあまり見受けられなかったように思われる。このことはネタ作りにおいては、層が固定されるというメリットにもなると思うが、伝道の観点からだと幅広い伝道とは言えないかもしれない。この部分は課題として残っているように感じられた。

今回五組の演者による漫才法話を聞いたが、次にそれぞれ特徴を笑いの視点から改めてまとめると共に、伝道の観点からどの形式が適切になるのかを考えていきたい。

第二節　笑いの技術における分析

第一項　笑いの分類

漫才法話における最も大きな要素は、笑わせる部分にある。しかし、一概に「笑い」といっても、そこにはさまざまな種類の笑いがある。この笑いの尺度を示したものには、ベルクソン『笑い』や『ウケる技術』など、さまざまあるが、今回は、西条みつとし『笑わせる技術』の尺度を用いた。理由としては、西条みつとし氏が元お笑い芸人であり、数多くのお笑いスクールやお笑い事務所で講師も務めておられるという経歴から、漫才という視点からの分析において最も今回のテーマに有効だと考えたためである。西条氏は『笑わせる技術』において、笑いを九つに分類されている。この章では、この分類を参考に漫才法話における笑いの導き方を考察していく。

① 共感の笑い

話者の言動によって、笑わせたい相手に共感をもたせて笑いを生む技術である。これは他者に自分の気持ちを理解させ聞き手に自分との仲間意識を与えることで生まれる笑いである。注意すべきことして、普遍的な話題だと共感は得られやすいが、普遍的すぎると、それは「当たり前」で終わってしまう。そのため、扱う話題は漫才を見せる対象者や場所、時間や時期によって変える必要があると考えられる。[5]

② 自虐の笑い

話者の言動で、笑わせたい相手に優越感をもたせて笑いを生む技術である。ポイントとなるのは、自虐であるため基本的には自分にとってマイナスであったことを話すことになり、聞き手の警戒心を緩める効果も期待でき

る点である。そのため、「自虐の笑い」は知り合いはもちろん、初対面の相手にも有効な技法だと考えられる。しかし、その場に応じた適切な度合いの話題を選ぶことが重要になってくる。聞き手が同情したり、心配したりするレベルの不幸だと相手に優越感を与えることはできない恐れがあることは注意すべきである。[6]

③ 裏切りの笑い

これは、話者の言動で、相方の予想を裏切り、その様子を聞き手に見せることで、優越感をもたせて笑いを生む技術である。これは自虐の笑いと「聞き手に優越感をもたせる」という最終的な目的は一致しているが、相方への裏切りという過程がポイントであり、話者から裏切りを受けた相方は、さまざまに感情が揺れ動く、それを見ることを通して聞き手は優越感を感じられる。しかし、その場に応じた適切な裏切りの度合いを選ぶことが重要であり、聞き手が同情するレベルの裏切りだと優越感を与えることはできないことは注意すべきである。[7]

④ 安心の笑い

緊張感を利用し、話者の言動で聞き手に安心感を与えて笑いを生む技術である。しかし、①～③の笑いとは異なり、前準備にあたる相手に与える緊張感の度合いだけでは、笑いの大きさは変わりづらい。安心の笑いを上手く扱うには、他の笑いとの組み合わせが必要であり、そのバランスによって笑いの大きさは変わってくる。[8]

⑤ 期待に応える笑い

話者の言動で、聞き手の期待に応え、満足させて笑いを生む技術である。つまり、話の内容や流れから、聞き手に次の話者の言葉や動きに期待をさせることが重要である。そして、全体の期待が重要であり、一部の期待を

優先しては、大きな笑いとはならないことは注意すべきである。[9]

⑥ 無茶の笑い

話者の言動で、聞き手に「自分にはできないことをやってくれた」という快感をもたせて笑いを生む技術である。この自分にはできない無茶とは、恥ずかしさや恐怖の感情に対する無茶と、下ネタやタブー、社会の暗黙のルールを破るといった、社会に対する無茶の二種類がある。しかし、一般的に無茶と思われる内容は避けるべき内容であり、そこから快感につながるかは人それぞれであるたことは注意すべきである。[10]

⑦ 発想の笑い

話者の言動で、聞き手に非日常感を与え、ワクワクさせ笑いを生む技術である。発想においては、話者の言葉で聞き手に想像させることが必要なため、聞き手の想像力や話者の伝える話術が重要となってくる。[11]

⑧ リアクションの笑い

話者の言動で、聞き手に、今自分に起きている不幸を利用し、優越感をもたせて笑いを生む技術である。リアクションにおいては、置かれた状況に対してどのように反応し、その時の感情を伝えるかが重要であり、その伝え方にも、言葉や表情、体の動きなど効果的に活用し、伝える能力が必要となる。しかし、リアクションも極端に大袈裟だったりすると、見破られ、笑いに繋がらないことも注意が必要である。[12]

⑨ キャラクターの笑い

話者が、聞き手の知っている「自分」を演じ、聞き手に「嬉しさ」を与えて笑いを生む技術である。ここでの

キャラクターとは、聞き手から見える話者のイメージのことであり、見た目や立場から考えられる表面的キャラクターと性格から考えられる内面的キャラクターがある。[13]

第二項　漫才法話における笑いの分類からの考察

次に前項での分類を基に、五組の漫才法話における笑いの技術をそれぞれ分析する。

（三千大千世界）

①共感の笑い／③裏切りの笑い／④安心の笑い／⑤期待に応える笑い／⑦発想の笑い／⑧リアクションの笑い／⑨キャラクターの笑い

（観音日和）

①共感の笑い／②自虐の笑い／③裏切りの笑い／⑤期待に応える笑い／⑦発想の笑い／⑧リアクションの笑い／⑨キャラクターの笑い

（Seppo-CCQ）

①共感の笑い／②自虐の笑い／③裏切りの笑い／⑤期待に応える笑い／⑥無茶の笑い／⑦発想の笑い／⑧リアクションの笑い／⑨キャラクターの笑い

（伝道集団アサカラザル）

③裏切りの笑い／⑤期待に応える笑い／⑦発想の笑い／⑧リアクションの笑い／⑨キャラクターの笑い

（ドドん）

②自虐の笑い／③裏切りの笑い／⑤期待に応える笑い／⑧リアクションの笑い／⑨キャラクターの笑い

以上の分類結果から、五組の漫才法話において使われていた笑わせる手法は以下のようにまとめられる。

①三回②三回③五回④一回⑤五回⑥一回⑦四回⑧五回⑨五回

まず、以上の調査結果から、五組中四組以上で行われた笑いは五種類あり、一方であまり用いられなかった笑いは、安心の笑いと無茶の笑いであったことがわかる。安心の笑いにおいては、聞き手に安心感を与えるための前段階として不安にさせる必要があるが、そこが仏さまの教えを扱う漫才法話とは相性が悪く、そもそも不安にさせない話の内容が多い他、もし不安にさせたとしても、次につながるのは仏さまの教えによる安心であることが多い。そのため笑いにつながることが少ないように考えられる。同じく無茶の笑いにおいても、聞き手が「自分にはできない」と考えているようなことをやる必要があり、先に述べた感情に対する無茶や、社会に対する無茶などが必要になってくるが、漫才法話の基盤が仏さまの教えであるため、聞き手はもちろん、漫才をする僧侶自身も他力の教えであるため、聞き手ができないようなことをすることが難しいのではないかと考える。

以上より、漫才法話における笑わせる技術としては、大前提として仏さまの教えというのが根底にあるため、使われる技術にも差があることがわかり、通常の漫才ほどは使われる幅はないことがわかった。

第三章法話からの分析

次に法話を基盤として、漫才法話を分析していく。

第一節　法話の構成

基本的な法話の構成について、僧侶教本Ｂの内容を参考にまとめると次のようになる。①讃題(聖教の言葉)や②序説で導入を行い、③本説では法義説(讃題に関する言葉挙げ、讃題の意味を明らかにする)や譬喩・因縁(さまざまな角度や方向から讃題の内容を深めていくためにわかりやすく親しみやすい話や例え話をする)を経て讃題の理解を深め、④欠勧では合法(まとめ)を行う。[14]

では、この法話において教義を広める際に重要なことはなんであろう。まず、浄土真宗本願寺派総合研究所には、「浄土真宗の伝道は「仏徳讃嘆」と「自信教人信」という言葉につくされます。」[15]とある。私はこれに加えて、「教えを伝える技術」が強く必要だと考える。

第二節　法話における技術

前節で述べた「仏徳讃嘆」「自信教人信」を前提として行われる法話であるが、話者の言葉や思いを正確に聞き手に届けることができなければ、それは真に法話で教えが伝わったと言うことはできない。この法話における話す技術として、曹洞宗を代表する布教師である阿部圭佑氏は「①リズム感②ルックス③即応性④面白味⑤表現力

⑥現代性⑦話の間⑧刺激性⑨具体性⑩音楽性⑪明るさ⑫余韻」[16]を挙げている。

この十二分類された法話に必要な技術において、漫才法話に必要、または活用できる技術の有無を考えると、①から⑪までの技術は漫才法話にも通用すると考えられる。しかし、⑫余韻に関しては、漫才法話では感じられにくい。前章で述べたように漫才法話では「笑い」の要素が強く、法話ほど仏さまのありがたみをまっすぐとは感じにくい。そのため、漫才法話から感じる余韻は、面白さや楽しさからくる満足感が主な理由となってくる。

一方、法話で感じられる余韻はなんであろう。法話と漫才法話を比べたとき、法話の大きな特徴に「讃題」がある。そこで明確に親鸞聖人の「和讃」や蓮如上人の『御文章』の言葉を引用し紹介するため、聞き手は教えそのものを言葉として耳にすることができる。この点は漫才法話では、導入することは難しい。その理由としては、笑いが重要であることや、話の展開が比較的自由であることから、笑いを重視し過ぎると教義そのものを貶してしまう恐れがあるため、そのような法義に関する笑いは避けられているように思われる。そのため、漫才法話と比べると、法話での讃題、序説、本説、結勧と言う定まった型の上で一つのテーマを学ぶということは、得られる学びの深さは、より深いものになり、それゆえ聞き手は良い法話で余韻を味わえるのでは無いだろうか。

以上、法話と漫才法話を比較した際の大きな特徴としての「讃題」の存在に注目したが、この第一節でまとめた法話の形式に漫才法話を当てはめた場合は、どのような構成になるだろうか。前章の考察でも述べたように、さまざまな笑いを取り入れることを通して、仏教をより身近にわかりやすく伝えることこそが漫才法話の魅力である。そのため、漫才法話は、法話の構成における本説での譬喩や因縁をより詳しく、より身近にしたものだと

言い換えることができる。このように仮定するならば、法話という伝道方法から漫才法話への形式の変化には、どのような理由があったのだろうか。そこには門徒をはじめとした法話を聞く人間の変化があると私は考える。

第三節　行う対象者の変化

まず、法話をはじめとした布教活動について、宗祖である親鸞聖人の記述を確認する。親鸞聖人は、『唯信鈔文意』の結びにおいて次のように述べられている。

> いなかのひとびとの、文字のこころもしらず、あさましき愚痴極きわまりなきゆゑに、やすくこころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり。ここらあらんひとは、おかしくおもうべし。あざけりをなすべし。しかれども、おおかたのそしりをかえりみず、ひとすじに、おろかなるものを、こころえやすからんとて、しるせるなり。[17]

このことから、当時は、書をそのまま読むことや法話のように聞くことで理解することができたのかもしれない。しかし、現代人に同様の伝道効果はあるのだろうか。このような文書伝道について、現代における伝道効果は薄いと考えられる。例えば、本願寺における本願寺新報や大乗の購読数の変遷に注目する。このデータから分かるように、本願寺新報は二〇一三年の 1,332,002 部から二〇二二年では 1,039,364 部と約四分の三、大乗は二〇一三年の 180,320 部から二〇二二年では 110,843 部と約五分の三と減少している。[18]また、コロナ禍であり家で過ごす家庭が多かったと考えられる二〇二一年、二〇二二年でさえ、購読部数は減少していることから、これら

文書における伝道は時期や世間の流れ関係なく、減少していくと考えられ、まだデータの出ていない今年度も減少していると想定される。

では、なぜこのように本を読むという習慣、文化は薄れてきたのだろうか。この理由として娯楽の発達があると考えられる。現在我々の周辺には、スマホやパソコンなど様々なインターネット機器があふれており、それらにより、YouTubeやゲームなど多種多様な娯楽に触れることができる。これらの最大の特徴は、時間や場所を縛らない点にある。そのため、わざわざ本を買ったり、取り寄せたりすることなく、スマホ一台で無料で楽しめる娯楽に流されてしまうのではないだろうか。

また、これらの環境の変化は大人でも同様であり、以前ほど長文を読む、長い話を聞くという機会は減っていると考えられる。このような背景があるため、通常の法話での仏さまや親鸞聖人のありがたい話も理解できず、ただ長い話となっているのではないだろうか。この理解能力の低下という部分について、葛野洋明氏は、「現代における真宗伝道の課題」の中で、具体的な課題として、「①専門用語の問題②現実的課題との乖離③マンネリ化した伝道方法の打破」[19]の三点を挙げられている。この①専門用語の課題を解決するための一つの策として、漫才法話は効果的なのではないだろうか。しかし葛野洋明氏は、同時に専門用語の課題への取り組む上での危険も次のように述べられている。

「慈悲」を「愛」に、「仏陀」を「親様・まんまんちゃん・大いなるいのち」などに、また「信心」を「目覚め」、「名号」を「名前」と置き換えたりすることは、専門用語を日常語に置き換えて、わかりやすく親しみ

やすくする工夫ではある。しかし、置き換えられた日常語のみで法話が展開すると、これらの専門用語が示す内容が曖昧となり、結果的には誤解を誘発するという可能性が大きくなっている。[20]

このことは、漫才法話にも当てはまる指摘であり、笑わせること、わかりやすくすることにばかり意識を向けてしまうと、無意識的にも仏さまの教えを曲げてしまうことにつながる恐れがある。

以上のことから、取り上げてきたような従来の法話による伝道効果の低迷がみられる現代だからこそ、現代の僧侶は対面での法話のみならず、オンラインでの法話や動画での法話といった工夫がされており、時間や場所を指定しないという現代人に合わせた変化をしていると考えられる。このような時代に合わせた新たな活動として、漫才法話は位置付けることができるのではないだろうか。

第四章　漫才法話実践者への聞き取り調査

第一節　那須弘紹氏への聞き取り調査

那須弘紹氏は、龍谷大学に進学後、龍谷大学学友会放送局に所属し、一九歳の時にはKBS京都でラジオコーナーを持っていた。大学卒業後は地元熊本に帰り、ラジオ局で番組を持つ傍ら、タレントとしての活動も続けられた。他力本願.netでのインタビュー記事で那須氏は「布教使として法話をさせていただくとき、今までラジオパーソナリティーなどのタレント活動をしてきた経験も活きているんだと気付きました。」と述べられていた。[21]

第一項　聞き取り調査の概要

那須弘紹氏への調査方法については、インターネットを活用しての、オンラインでのやり取りによる聞き取り調査の形式で行った。予め質問項目を細かく設定しておく構造化面接法をとり、回答により正確性を持たせることを重視した。質問においては、特に伝道という視点から、実践における僧侶としての意識や工夫についての意見に注目して行った。

第二項　聞き取り調査の内容と分析

◯漫才法話の始まりについて

まず「漫才法話」というワード自体が約十一年前は存在しておらず、那須氏が造語として作られたものだった。この背景には、組内の連続研修会において、「課題提起」→「話合い」→「発表」→「発表を踏まえての講評」と言う構成における「課題提起」の部分を堅苦しくない形にできないかと考えて、漫才形式で課題提起したのが発端であった。そのため、当初はそこで終わる予定だったのが、たまたま、その研修会を地元の新聞社が取材に来ており、そこで新聞に掲載されたことによって、その記事を見た団体（お寺以外）から、講演依頼を受けたときに「漫才法話」と名付けたことが始まりであった。

この回答から、現在、イベント内での名称や、インターネットで調べる際も使われている「漫才法話」の単語の起源は、約十一年前の連続研修会での那須氏の活動が始まりであったことがわかる。連続研修会の目的につい

ては、

「連研」がめざすのは、門信徒と僧侶がともに「現実の私と社会の問題を法に問い、聞き、語り合う」ことで、互いに念仏者としての自覚にめざめ、「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）を推進していくことです。[22]

とあり、加えて連研では、門信徒と僧侶お互いの意見を聞き合うための「話し合い法座」も行われている。これらのことから、漫才法話は始まりの段階で新たな法話という位置付けというよりは、門信徒をはじめとした聞き手にわかりやすく仏教についての話をするという側面が強くあったことがわかる。

◯どのような場面で漫才法話は実践されますか。

基本的には、依頼があったときに行われている。始めたころは、お寺関係からの依頼はほとんどなく、会社の総会や、学校（小中高大さまざま）、行政関係など様々な団体からの講演依頼も多かったが、ここ数年はお寺の法座での依頼が増えており、現在は半々程度となっている。

この回答から、漫才法話の始まりが連研であったように、対象者の固定化がされていなかったことで、さまざまな団体からの依頼につながったのだろうと予想される。この活動の幅は、浄土真宗について触れてもらう機会としては有効に感じられる。一方で、これまでの継続された活動が近年の法座での依頼の増加につながっており、寺が漫才法話者を知り、呼ぼうと考えられる程度には、寺院関係者には浸透してきているようにも考えられる。

◯実戦に必要な能力や気をつけることについて

必要な能力については、人前で話すことについての一般的な能力や慣れはもちろんだが、漫才ということから、掛け合いの対応力と「間」の取り方も練習が必要だと述べられていた。また、気をつけられていることとしては、漫才としての面白さと法話としてのありがたさのバランスを意識してネタを作ることを挙げられていた。その中でも一番気を付けているのは、誰かを傷つけるような笑いの取り方はしないということであった。

この回答から、掛け合いの対応力や「間」の取り方、これらを那須氏は漫才法話を始める前のタレントとしての活動や、ラジオ番組の経験から育成されていると考えられる。

○法話と漫才法話の違いや魅力について

細かな違いは多々あるが、一番の違いは Seppo-CCQ の場合、漫才法話はご法話を聞いたことがない人をより意識している部分だと述べられている。ただ、感覚としては「法話Ⅲ漫才法話」であり法話のジャンルの一つとしてとらえられていた。また、お寺の法要でやるネタ、一般の会場に来られる方の前でやるネタ、学校等でやるネタと言うように、できるだけその層に合わせてネタを考えることも気をつけられていた。

そして魅力については、法話の入口という役回りとしては、現在のところ最も有効な方法の一つだと考えられる点だと述べられた。そのため、Seppo-CCQ での活動においては、最初に漫才形式で二十分ほどのネタをやった後に、個々に二十分ほどのテーマにちなんだ法話をさせていただくというパターンをされている。そのような形で法話に触れるきっかけとなるのも魅力だと考えられていた。

この回答における、漫才法話を法話の入り口として活用されているというところから、漫才法話だけでは伝道

の効果としては不十分なことがうかがえる。そのため、Seppo-CCQでも漫才法話の後に法話という流れでやっておられると考えられる。また、時や場所によって扱うネタを変えられるという点は、法話ではおおもとのテーマを変えることしか出来ず、全体の重みは変わらないことと比べると、漫才法話特有の自由さであり、取れる幅の広さがあると思われる。

○漫才法話の今後についての考え

漫才法話には、笑いと法話のエッセンスが入っていることの二つ以外には縛りもなく、決まった形と言うものがないので、さまざまな方々の漫才法話を見て考えたアイデアを実践しやすい環境を作ることが大切だと考えられている。失敗や批判をされる恐れもあるが、批判の内容を確かめ、有意義であれば、それを踏まえて改良し、それ以外は無視すれば良いと述べられており、逆にその失敗を通して、さらに進化するように持っていけるような空気感を作ることができれば、漫才法話も広がっていくと考えられていた。

そして、今後については、ただただ必要とされるまでは、続けていければと考えておられ、その上で漫才法話に興味を持った人に自身のノウハウを紹介し、漫才法話を披露する場所を提供できればと考えられていた。

この回答では、漫才法話の自由度の高さを活かすために、まずは漫才法話が自由に行える環境形成が必要だと述べられていた。そのためには経験者と新たな漫才法話に興味を持った人とが交流し、情報共有ができるようなコミュニティの形成が必要だと考えられる。

第二節　保田正信氏への聞き取り調査

保田正信氏は、大阪の在家出身であったが、龍谷大学、大学院を卒業後、浄土真宗本願寺派布教使として全国のお寺で法話をされており、現在は大阪府高槻市の浄土真宗本願寺派金剛山一念寺の副住職をされつつ、龍谷大学宗教部に勤務されている。また、念仏道場桜蓮寺を建立された他、フリーペーパーののさまのライター兼イラストレーターの経験もある。

第一項　聞き取り調査の概要

保田正信氏への調査方法については、那須弘紹氏と同じく、予め質問項目を細かく設定しておく構造化面接法を用いて行ったが、形式は対面で行った。また、二名の漫才法話実践者に聞き取りを行う中で、共通する質問も行うことで、意図や工夫にどのような共通点や相違点が現れるかも注目しておく。

第二項　聞き取り調査の内容と分析

◯実戦に必要な能力や気をつけることについて

まず、必要な能力としては、話す能力全般が必要となる。その点を保田さん自身は地元が大阪であったことが大きかったと話されていた。小学生の頃からコンビを組んでお笑いをしていたことや、日頃から人と話す際にオチをしっかりつける習慣、面白く話すという習慣があったため、それらの能力は形成されてきたのだろうと自身を振り返っており、文化や土地柄が話す能力の形成には大きな影響を与えられると考えられていた。

次に気をつけられていることについては、教義理解をしっかりしておくことや仏教を蔑まないといった仏さまへの尊敬の念を持った上ですることだと述べられており、漫才法話の際も「合掌」「礼拝」をするようにされていた。また、技術的な観点からは、被って喋らないようにすることや、聞こえやすい声で話すことを挙げられた。

この回答から、漫才法話を行うにあたって、話術の形成には文化性や土地柄も大きく影響することがわかった。そのため、より一層話術については練習が重要と思われる。また、那須氏と保田氏で共通していたのが確実な教義理解の必要性である。この教義理解があるからこそ、ありがたい法話になるのであり、仏さまへの尊敬の念を持つことに繋がり、伝道の効果も高めているのだと思われる。加えて、誰かを傷つけるような笑いをしないという、仏教に限らない漫才にも共通して言える部分も共通しており重要であった。

○法話と漫才法話の違いや魅力について

法話と漫才法話では、最終的な話の着地が大きく違う。漫才法話では、笑いで締められることが多い。そこに至るまでで得られる仏教的知識は多く、幅も広くすることが可能であるが、聞き手に与えられる感動は少なくなる。一方法話では最終的には聞き手に「じーん」とこさせるため、法話を通して感動を得られる。また、漫才法話の魅力としては、年齢や興味のある無しに関わらず、話を聞いてくれる点だと述べられた。

この回答から法話と漫才法話で時間や扱うテーマが同じだとしても、聞き手が感じる話の重みに差があることがわかる。この差は、「笑いが必須な漫才法話」と、「笑いもある法話」という違いから生まれると考えられ、だからこそ、那須氏の言われた「法話≠漫才法話」という関係性になると考えられる。また、同じくガタピシフラ

ワーズにおいても、今年度やられた漫才法話の一例では、漫才法話を行った後に、漫才法話でのネタの解説を含めた法話を行われていた。これにより、本来の法話で知れる仏教のありがたさはそのままに、難しさや抵抗感をなくして聞くことができるようになると考えられる。

◯漫才法話の今後についての考え

漫才法話をこれまでされた変化としては、コンビとしては声のバランスが良くなってきたという実感や、周りからの評判も良いこと、実際に漫才法話を聞いた人から「法座にも来たよ」という声を聞くようになったと述べられていた。しかし、今後の漫才法話の展開については、広まりもしないが無くなりもしないだろうと考えられていた。これは、あくまで漫才法話は法話の入り口として行われるのであり、主流になるのはおかしく、呼ばれて行われるぐらいが良いのだという考えが理由であった。最後に今後の保田氏の展望としては、現状維持とされつつ、伝道集団アサカラザルのような芸能グループを形成して活動するのも面白そうとの考えもお持ちだった。

この回答での声のバランスというのは、僧侶であることの特権のように思われる。漫才、漫才法話共に見た目や表情など注目される部分は多くあるが、最も重要なのはもちろん「声」である。通常の漫才においても、「相方と声色が合うこと」は重要とされている。これは、コンビとして活動を続けるうちにお互いの声が近づいていくことで、聞き心地の良さにつながっていく。この部分が僧侶の場合は、毎日のお勤めや法要での読経を経て、人に安心感を与えるような声が出るようになっていく。このため、僧侶による漫才法話や法話では、明確な定義づけは難しいが、聞く人を安らかにすることも可能なのではないだろうか。

また、今後の漫才法話については、漫才法話の要素である漫才が、第一章で扱った萬歳のように伝統文化になってしまうと、漫才法話も失われてしまう恐れがあるが、現時点でその心配はないため、現在の漫才法話が続く限りなくなることはないと考える。その上で、伝統文化にならない一方、漫才法話が伝道の主流になるわけではなく、あくまで法話の入り口であることを理解した上で活動していくことが重要になると考える。

結論

先行的研究が極めて少ない本研究は、何よりも漫才法話の実践事例に重点を置いて示すことが重要だと考える。そこで、本論文では「漫才法話んグランプリ」や二名の漫才法話実践者への聞き取り調査などを行い、現在の漫才法話の状況、そしてそこから考えられる可能性や課題を考察した。

まず、可能性については、漫才法話のもつ自由性を上手く活用することで、法話の入り口として期待できる点が挙げられる。しかし、そのためには漫才法話実践者は、十分な教義理解を持っていることはもちろん、聞き手に伝える話術や、漫才であることから必要な笑わせる技術も重要となってくる。聞き取り調査を行った那須氏や保田氏は、僧侶であることに加えて、タレント経験や地元で培われた話力が活かされておられたことから、漫才法話を行う上では、僧侶としての活動だけでなく、日々の生活から話す能力の育成をしておくことが重要となっ

てくる。また、笑わせる技術もさまざまあり、上手く活用するためには、漫才師である前に、一人の僧侶だということをしっかり意識した上で行うことが必要だと考えられる。

また、今回取り上げた方々をはじめ、現在の漫才法話実践者は男性の方が多く、女性の漫才法話実践者は見受けられない。この背景には住職に就くのが男性が多いことが大きな理由としてあると思われるが、今後の漫才法話の発展次第では、女性による漫才法話も行われることも考えられる。女性住職や坊守が漫才法話を行うことで、これまでとはまた違った見方の漫才法話の実践となり、漫才法話の一種の広がりとなるのではないだろうか。

一方で、課題としては、漫才法話を実践できるようなイベントが少ないことが挙げられる。今回取り上げた「漫才法話んグランプリ」の他、聞き取り調査を行った保田正信氏の相方である「ガタピシフラワーズ」の水谷了義氏が実行委員長を務めておられる「ほとけSUMMER」が年一回行われているが、定期的に行われている行事が他になく、単発でのイベントで行われることがある程度になっている。この現状について、聞き取り調査を行った那須氏や保田氏の今後の考えを基準として考えるならば、大きな問題はないと思われるが、私は漫才法話をする機会は積極的に増やすべきだと考えている。理由としては、確かに述べられていたようにあくまで法話が基本であるという前提の上で漫才法話は成り立っているが、漫才法話の可能性でも挙げた法話への入り口としての漫才法話の有効性を考えるならば、若い層が興味をもつことが重要であると思われる。そのため、現役の漫才法話実践者の活動の幅を広げるというよりは、新たに漫才法話に興味を持った人が実践しやすい環境を形成をすることが漫才法話を一般の人が知る機会が増えることにつながるのではないだろうか。

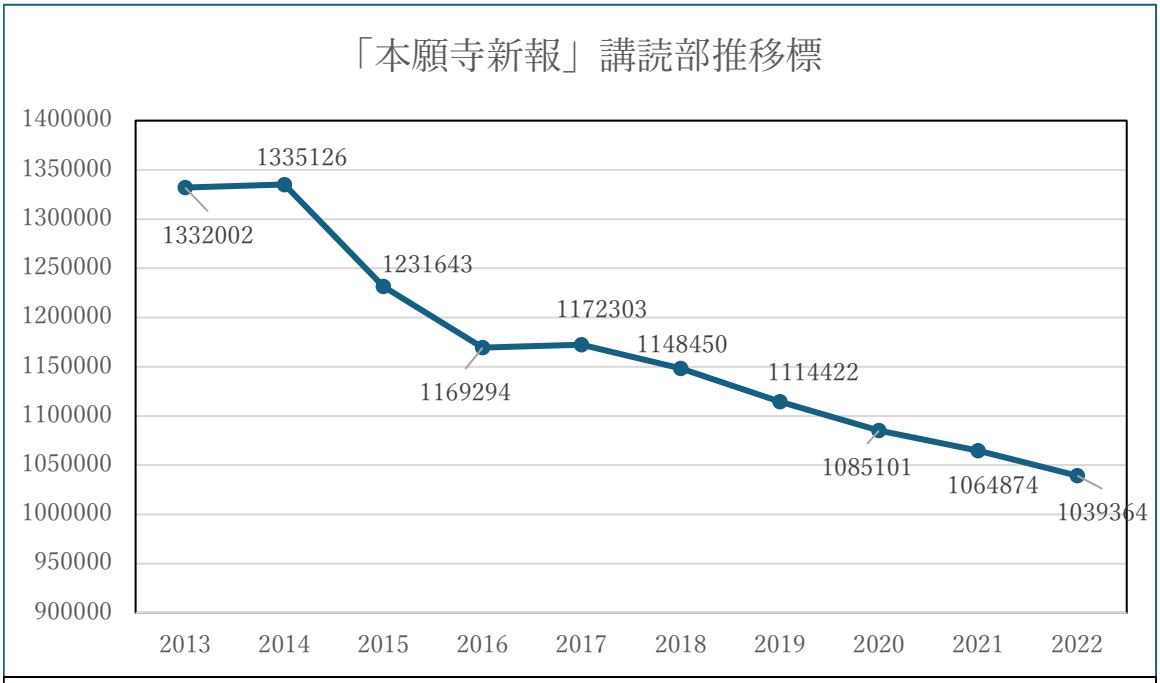
例えば、「ほとけSUMMER」では、漫才法話の他、仏前結婚式やテクノ法要、お坊さん二人組ユニット「Tariki Echo」のライブなどさまざまな新しい企画が実践されている。もちろん批判や課題もあると思われるが、そのような挑戦する場、やってみる機会があることが重要であり、現役の漫才法話実践者だけでなく、新たに漫才法話をやってみたいと考えている人のための環境形成が重要となってくる。

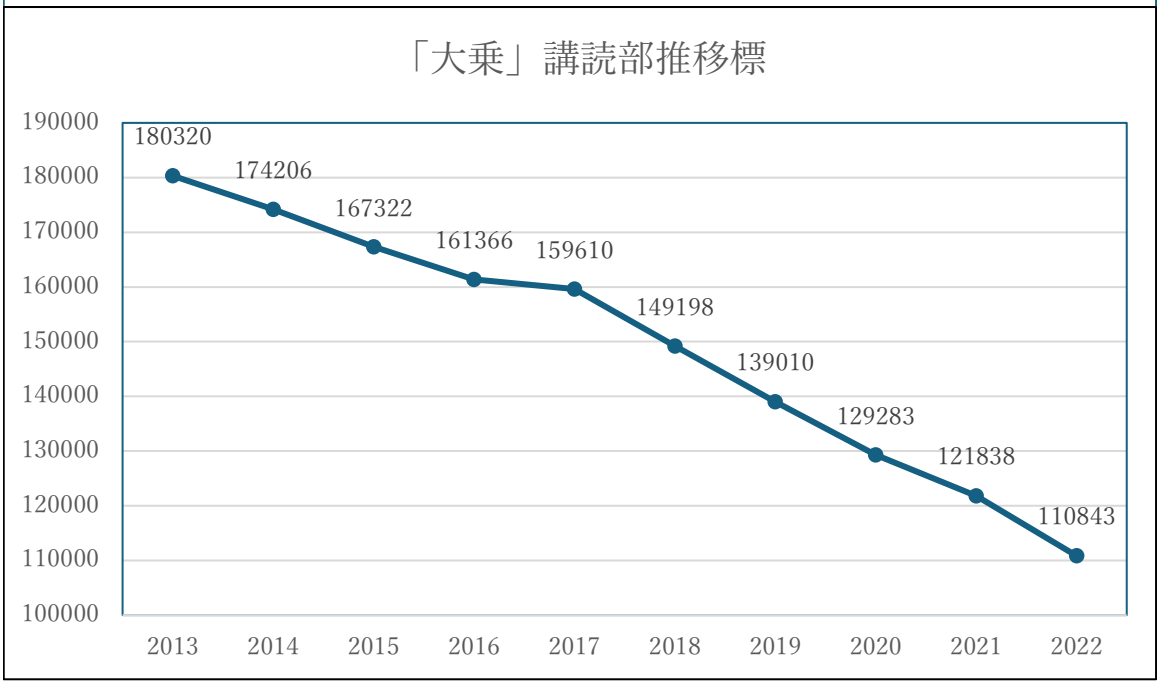
以上、漫才法話を伝道の観点から考察したが、漫才法話だけでは十分な伝道を達成することは難しいことがわかった。漫才法話は、あくまで法話の入り口となるのであり、その後の法話を経て漫才法話の目的は達成される。しかし、漫才法話を行うことで、新たな層に仏教に興味を持たせるという効果は期待できる。その点から、漫才法話は伝道の幅を広げる活動であり、その一助となる活動だと言えるだろう。

註

1 南博、永井啓夫、小沢昭一『ことほぐー萬歳の世界』一一六―一二一頁
2 南博、永井啓夫、小沢昭一『ことほぐー萬歳の世界』一二二頁
3 南博、永井啓夫、小沢昭一『ことほぐー萬歳の世界』一三九―一四一頁
4 あいち伝統芸能ナビ https://www.pref.aichi.jp/bunka/dentougeinou/story/owarimanzai.html（二〇二四年十一月二十五日参照）
5 西条みつとし『笑わせる技術』二一―二六頁
6 西条みつとし『笑わせる技術』五一―五四頁、六七頁
7 西条みつとし『笑わせる技術』七五―七七頁、一〇二頁
8 西条みつとし『笑わせる技術』一一三―一二〇頁
9 西条みつとし『笑わせる技術』一三五頁、一四七―一四八頁
10 西条みつとし『笑わせる技術』一五六―一六三頁
11 西条みつとし『笑わせる技術』一六五―一六六頁
12 西条みつとし『笑わせる技術』一七二―一八五頁
13 西条みつとし『笑わせる技術』一八八―一九〇
14 浄土真宗本願寺派僧侶養成部、浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗本願寺派　僧侶教本B』一四四―一四六
15 浄土真宗本願寺派総合研究所　http://j-soken.jp/ask/260　（二〇二四年十一月二十日閲覧）
16 阿部圭佑『話道ー仏教法話の実践』七七―九八頁
17 浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典ー註釈版　第二版ー』六九四―六九五頁

[18] 浄土真宗本願寺派統合企画室宗勢要覧二〇二二年度版 https://www.hongwanji.or.jp/upload_img/shu-seiyouran2022.pdf （二〇二四年十二月一日参照）


「本願寺新報」講読部推移標
1400000
1350000
1300000
1250000
1200000
1150000
1100000
1050000
1000000
950000
900000
1332002
1335126
1231643
1169294
1172303
1148450
1114422
1085101
1064874
1039364
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022


「大乗」講読部推移標
190000
180000
170000
160000
150000
140000
130000
120000
110000
100000
180320
174206
167322
161366
159610
149198
139010
129283
121838
110843
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022

[19] 葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第五〇集創設五〇周年記念特集号七八頁

[20] 葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第五〇集創設五〇周年記念特集号七九頁

[21] 他力本願.net https://tarikihongwan.net/category1/souryo/22451.html/3/（二〇二四年十一月十五日参照）

[22] 浄土真宗本願寺派公式Webサイト https://www.hongwanji.or.jp/jiin/renken.html#renken_02（二〇二四年十二月一日参照）

参考文献

書籍

南博、永井啓夫、小沢昭一『ことほぐー萬歳の世界』白水社、一九八一年

鶴見俊輔『太夫才蔵伝』平凡社、二〇〇〇年

富岡多恵子『漫才作者　秋田實』平凡社、二〇〇一年

大塚信一『拡大するモダニティ』岩波書店、二〇〇二年

浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典―註釈版第二版―』本願寺出版社、二〇〇四年

小林昌平、山本周嗣、水野敬也『ウケる技術』新潮社、二〇〇七年

日川好平『最後の万歳師―尾張万歳家元　五代目長福太夫　北川幸太郎』風媒社、二〇一一年

中丸宣明『コレクション・モダン都市文化「第六七巻　漫才と落語」』ゆまに書房、二〇一一年

波佐間正己『法話布教の手引き』探求社、二〇一三年

阿部圭佑『話道―仏教法話の実践』国書刊行会、二〇一五年

ベルクソン『笑い』光文社、二〇一六年

神子上憲了『新編　現代説教の真髄』自照社出版、二〇一七年

西条みつとし『笑わせる技術』光文社、二〇二〇年

伊東恵深『法話のきほん』法蔵館、二〇二〇年

浄土真宗本願寺派僧侶養成部、浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗本願寺派　僧侶教本B』本願寺出版社、二〇二一年

神保喜利彦『東京漫才全史』筑摩書房、二〇二三年

論文

葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第五〇集創設五〇周年記念特集号、二〇一一年

参考URL

・あいち伝統芸能ナビ　https://www.pref.aichi.jp/bunka/dentougeinou/story/owarimanzai.html
（二〇二四年十一月二十五日参照）

・浄土真宗本願寺派統合企画室宗勢要覧二〇二二年度版
https://www.hongwanji.or.jp/upload_img/shu-seiyouran2022.pdf（二〇二四年十二月一日参照）

・他力本願.net　https://tarikihongwan.net/category1/souryo/22451.html/3/
（二〇二四年十一月十五日参照）

・浄土真宗本願寺派公式Webサイト　https://www.hongwanji.or.jp/jiin/renken.html#renken_02
（二〇二四年十二月一日参照）